

## 文化財の保存に関する国際会議（IIC, ICOM）参加報告

沢田正昭\*

1978年、9月から10月にかけて文化財の保存に関する二つの国際会議が開かれた。オックスフォードでの国際歴史美術資料保存研究会・第7回世界大会（The International Institute for Conservation of Historic and Artistic Works — IIC）と、ザグレブ（ユーゴスラビア）で開催された国際博物館会議・第5回保存委員会（The International Council of Museums for Conservation — ICOM）である。

前者には26ヶ国 380人が、後者には36ヶ国 350人の保存関係者が参加した。保存科学の重要性と、この分野の目ざましい進展ぶりを示す大きな数字である。以下、筆者の発表内容を含めてその概要を報告する。

国際歴史美術資料保存研究会・第7回世界大会（会期9月17日～9月23日）のテーマは絵画・工芸品における木材の保存である。それは次の六項目に沿って研究発表・討議がおこなわれた。

- (1) 木材工芸技術
- (2) 生物による木材の劣化
- (3) 家具・調度品の保存
- (4) 木彫の保存
- (5) 木造建造物の保存
- (6) 板絵の保存

講演要旨は約200ページのプレプリントにまとめられ、IICから発行されているので参照されたい。ここでは、一部話題になったところを紹介する。(1)では、湿度変化にともなう木材の寸法変化の基礎的な問題点を独自の保存修理品目に合わせて検討している報告が多かった。(2)では燻蒸についての発表が主であったが、その使用薬剤の選択は一般常識の域を出ていないとの印象が強かった。殺菌力の優れた酸化エチレンは炭酸ガスと混合して使用するのが普通であるが、わが国の場合、その濃度が高すぎると対象物の彩色（密蛇僧、鉛白などの鉛系顔料）に損傷を与えるといわれ、炭酸ガスの使用は敬遠されている。すなわち、炭酸ガス濃度を最小限に低くするか、或いは全く使用しないなどの配慮がなされているのに対して、Dr. Hickin（イギリス）が報告したものは、炭酸ガス濃度が10%にも達し、それでも特に対象物への影響はないというものであった。彩色の施された対

---

\* 奈良国立文化財研究所，奈良市佐紀町

象物を経験していない証拠であろう。さらには、微々たる損傷など全体の保存のうえからは問題にならないとの考え方にもみえた。

修理すべき木彫品や家具などには漆が塗られたものも多い。ヨーロッパ・アメリカではこれに対する保存材料に漆を利用することはまず考えられず、専ら、合成樹脂などを利用する。そして、漆と同等、或いはそれ以上の保存効果を得ていると報告している。しかし、一方では漆製品は同材質の漆で保存処理したいとの考え方かなり強いようである。

絵画の保存修理は、保存科学関係の分野でも花形であり、会議に参加してくる人もまた多い。ヨーロッパ独特の伝統があり、その技術は改良に改良を重ねてきている。そして、どんな小さな博物館・美術館にも、そこに保存関係の設備があれば、「絵画」の保存施設と技術者だけは必ずそろっていると言っても過言ではない。研究会の内容とは直接関係しないが、わが国における公共の博物館・美術館で絵画の修理施設を持つ機関は皆無に等しい。保存科学の分野で古い伝統と進んだ技術を持つ絵画の保存に関する施設の充実が、これからの日本では必要となってくる筈である。

国際博物館会議・第5回保存委員会（会期10月1日～10月7日）の開かれた会場はザグレブの中央ホールである。先のIICの会議からひき続いて参加してくる者が圧倒的に多く、会場への途中、オックスフォードで覚えた顔に挨拶を交わす楽しさが心地よい。

ザグレブ大会は、Hume氏（ユーゴスラビア）による「ユーゴスラビアにおける文化財の保存と組織に関する問題」という記念講演で始まった。文化財行政の組織が十分でないとの訴えはいつものことであった。

研究会は次の19項目にわたって分科会が持たれた。①新しい実験方法の応用、②油絵キャンパスの構造修理、③民俗資料、④文書、⑤多色彩飾像、⑥20世紀の絵画、⑦出土木材、⑧関係材料、⑨織物 ⑩石造品、⑪修理の理論とその歴史、⑫美術品の輸送法、⑬博物館学資料、⑭図面および彩色写本、⑮壁画とモザイク、⑯コーティング、⑰保存への原子核の応用、⑱ライティングとエアコンディション、⑲皮革製品の保存、⑳イーゼルペインティング、㉑考古資料の珪酸化合物、㉒レストレーターの研修、㉓金属製品の保存。

分科会は同時に4～5項目が開かれ、研究発表・討議は5日間にわたった。したがって、会議の途中で抜け出して回らない限り、5項目を越えて参加できないしくみになっている。それでも何人かは途中で分科会の席を変えていた。

筆者は、⑦出土木材の分科会で発表する機会を得たのでその模様を報告したい。座長はオーストラリアのカンベラ応用科学学校のコリン・ピアソン博士（Dr. Colin Pearson）である。前回まではオランダのムニケダム博士（Dr. Munikendam）であった。急な交替であったため、ピアソン博士は研究会運営に関する資料を十分に与えられないままであり、些かの戸惑いを見せていた。

グロソー氏（Grosso・アメリカ）の協力を得て、熱気溢れる研究会が始まった。研究発表の内容は次のとおりである。

- (1) 船体の保存（J. de Jong, オランダ）
- (2) トラキアの丸木舟の保存（A. Mihalion, ブルガリア）
- (3) 出土木材保存のための新しい透明な有機ケイ素化合物ポリマーの試験（N. Yashvili, ソ連）
- (4) 日本における出土木材の保存（沢田, 日本）
- (5) 最近の木材保存に関する情報交換（L. Barkman・スウェーデン, H. Grosso・アメリカ, 沢田・日本）

L. Barkman 氏はスウェーデンのストックホルム港底からひきあげられた 17 世紀の木造軍船「バーサ」号の保存の責任者である。氏は巨大な船体（全長47m）に吸湿性の優れたポリエチレングリコールの水溶液を散布・浸透させることによって木材の乾燥による変形を防ぎ、保存しようとした。数年前の同氏の報告によれば、常温で軟こう状を呈するポリエチレングリコールをしみこませたあと、固形を呈するものを表層部にしまして硬化する予定であった。しかし、今回の会議ではこれらの溶液の散布による浸透はむづかしく、常温で液状の低分子量のポリエチレングリコール水溶液を散布して乾燥しないようにするだけの方法に後退したと発表した。出土木材の保存のためにポリエチレングリコールを最初に、しかも大量に使用したのは「バーサ」号だけだに意外であった。

筆者は木材の保存法のうち、木筒の保存について「PEG 含浸法」と「真空凍結乾燥法」を中心に報告した。同法の大規模な運行は、わが国以外ではデンマークの他あまりなく、参会者の関心を集めた。反面、現在の主な保存法といえば、相当の経費を要するものであり、それなりの評価はあっても、より安価な処理法の開発を誰もが望むところである。ポーランドの Jędrzejewska 女史はポリエチレングリコール以外の物質による安価な処理法の共同研究の必要性を強く主張していた。

筆者は、経費面の問題は重要視せざるを得ない現状であるが、矢張、効果的な保存法の開発こそ優先されるべきだと考えている。有名な画家の絵に県予算のかなりを費やしても、それを保存管理するための施設や組織づくりにまでは予算がまわらないという今日の文化財保存への理解の程度こそ問題だからである。

その他の分科会では、⑩石造品の保存にアクリル系モノマーの浸透テストや、⑪金属製品のクリーニング法として、プラズマ現象を応用するなどの研究が注目されたが、紙面の都合上、割愛した。これらの発表内容はすべてプレプリントに納められており、購入することもできるので参照されたい。

## 編 集 後 記

1977年京都大学原子炉実験所の東村武信教授のところから、「考古学と自然科学」の編集事務局をお引きうけして既に3年の歳月がすぎた。その間、文部省科学研究費特定研究「自然科学の手法による遺跡・古文化財等の研究」が進行し、わが国におけるこの方面の研究は、画期的な発展をとげた。「考古学と自然科学」は勢いこの特定研究の成果を収録する形となり、多彩にして有益な論文で誌面を飾ることができた。この特定研究は昨年度で継続期間を了え、本年度はその成果をとりまとめて、総括報告書を刊行することになっている。

特定研究の一段落を機会に、本誌の編集を一時生みの親の東村教授へお返しすることにした。この第12号の編集事務は、同教授の研究室を中心に行なわれたものである。但し、印刷と予約・発送等の事務は、引き続き当方で行なった。本誌も12号を数え、固定した読者に加えて、新規の購読申し込みが跡をたたない。これは、この方面の学問への関心が、いよいよ高まりつつあることを示すとともに、本誌がその普及に果たしている役割の、極めて大きいことを物語っている。この方面の研究は、今や世界的に急速な発展をとげつつあり、これに呼応してわが国でも、来年度から新たな特定研究「古文化財に関する保存科学と人文・自然科学」が発足する。これにより、本誌の面目が一層躍如たるものとなること、疑いない。

終りに、本誌に関する煩瑣な事務を快く引きうけて処理した、東京大学総合研究資料館の小池裕子氏の労を多とする。

昭和55年2月

渡 辺 直 経